

中学校国語科における学習活動と情報教育との関連の分析

小川 亮^{*1}・鎌田 恵子^{*2}

(2005年8月31日受理)

Analysis of Learning Behavior in Secondary School Japanese Language Education and Its Relationship with Information Communication Technology Education

OGAWA Ryo and KAMATA Keiko

情報教育は、小学校、中学校、高等学校の各段階で体系的に実施されることが期待されている。体系的な実施のためには総合的な学習の時間だけでなく、各教科における学習活動と連携していく必要がある。本研究では中学校の国語科における学習活動を情報教育の立場から整理し、具体的に情報教育の目標との関連を検討している。さらに、中学校における実践例を示し、その効果を検討している。

キーワード：情報教育、情報活動、国語科教育、中学校教育

1. 研究の経緯

情報教育は、平成14年度から本格実施された小学校・中学校、15年度から実施された高等学校の学習指導要領の中で、小学校、中学校、高等学校の各段階において取り組む重要課題とされている。このように情報教育が重要課題とされる背景には、ミレニアムプロジェクトに始まるIT化に対応する国家的な取り組みがある。日本のIT政策は、e-Japan計画から2005年をターゲットにしたe-JapanII計画に移り、さらには2010年をターゲットにしたu-Japan計画（ユビキタス国家計画）へと引き継がれようとしている。

このような流れに対して、「2005年の教室を考える会」や、岡山県の情報教育センターは、理想的な教室環境と、そこで実現できる教育についてモデルを示している。しかし、理想的な状況ではない学校や、特に情報技術に明るいわけではない普通の先生方にとっては、現在自分が行っている教育から視点を移動すること自体が難しい場合があることも事実である。

小川・戸田・石野（2002）は、小学校の国語科と情報教育の関連について整理した結果を示し、情報教育と国語科教育の関連の強さを示した。また、小学校社会科の学習指導要領を分析する過程で、直接情報教育の目標と関係しないが、社会人として相互にコミュニケーションをとる上での基礎知識となる「物の見方」を「視点」として抽出することで、社会科教育と情報教育の強い関連

性が示された。さらに、教科書の内容を分析することで、普段の授業の中で効果的に情報教育的な活動を展開できることを示した。

小川ら（2003）は、発想法の一種であるマップ法を小学校と中学校の国語の授業に導入した実践を行い、その結果について分析している。その結果、中学校1年生ではマップを発表活動の考えのまとめに用いることが有効に働いていた。小学校3年生ではマップを用いて、自分の知っていることを作文で表現した。授業者からはマップを描くことの効果が認められたと報告が得られたが、実際に書かれたマップは、十分な情報の広がりが見られなかった。これらの結果から、発想法を小学校の3年生の時点で効果的に導入するためには、マップの描き方に関する十分な指導が必要であることが示された。また中学校1年生の段階では、多少課題が複雑で、答えが簡単に予測できないくらいの適度な難しさの課題を与えることで、マップを利用する効果が明確になることが示唆された。この実践的な研究から得られた知見は、情報教育の目標を国語科の学習活動の中で達成することの可能性を示している。

小川・荒島・井澤（2004）は、中学校の理科教育と情報教育の関連について検討した。中学校理科の第一分野と第二分野の学習目標の中で、情報教育の目標と関連する内容を抽出したところ、ほとんどすべての単元で情報活用の実践力との関連が指摘され、情報の科学的な理解についても、7つの単元で関連が示された。情報社会に

*1 富山大学教育学部 *2 宮城県涌谷町立涌谷中学校

参画する態度に関しては1つの単元（科学技術と人間）のみで関連が示された。また、情報活動の内容として、一般的な情報の検索や編集、表現、伝達の活動以外にも、理科特有の内容として、データの自動収集、記録蓄積、分析、視覚化などが含まれていることが示された。さらに、中学校における情報教育の目標の達成のためには、教科間の連携が不可欠であること、教科間の連携のためには、各教科の担当者が、それぞれ情報教育の目標と自分の教科の学習とがどのように関連しているかを明らかにし、意識して学習活動を展開することからはじめる必要があると主張している。

2. 研究の目的

本研究では、中学校の国語科における情報活動を、学習指導要領から抽出し、情報教育の目標と関連づけることを目的としている（研究1）。さらに、情報教育の目標を意識した国語科の授業実践の例を示し、その評価を行うことで、中学校における情報教育の実践の可能性を検討する（研究2）。

3. 研究1「指導要領の分析」

3-1. 方法

〔分析者〕

大学研究者、現職教員、ならびに情報教育を専門とする大学院生からなる研究グループで、分析を行った。

〔素材資料〕

研究の基礎資料として、中学校国語科の学習指導要領ならびにその解説書、教科書、文科省の情報教育に関する公式文書（文部科学省、2002）を利用した。

〔手続き〕

＜ステップ1＞学習指導要領の分析

学習指導要領の文章を読み、情報教育に関連する部分と、教科教育独自ではあるが、情報教育（特にコミュニケーション）の基本として必要不可欠と考えられる視点（考え方、いわゆる常識）を抽出した。情報教育の目標に直結する内容を「(情)」, 将来の情報活動に必要な視点を「(VP)」で示すことで区別して抽出した。

＜ステップ2＞情報教育との対応づけ

情報教育の目標と国語科に含まれる情報教育に関連する学習活動を対応づけた。

具体的な教育活動は教科書によって影響されるので、教科書の内容やそれを前提とした年間指導計画と、情報教育に関連する学習活動について対応づけを示した。

3-2. 結果

(1) 指導要領の分析

中学校国語科における情報教育に関連する学習目標と、教科独自の視点（ものの捉え方）を抽出した結果を、表

1に示した。中学校の国語の教育内容は、1年生と2・3年生の2段階で、話す・聞く、書く、読むの3領域と1言語事項での目標が示されている。情報教育との関連を分析したところ、漢字・文法・敬語表現などの言語事項以外は、ほぼそのまま情報教育の目標と一致することが明らかとなった。国語科では、視点にあたる内容は少なく、ほぼそのまま情報教育の目標に関連していることがわかる。

表1を見ると、中学校国語科の学習指導要領では、動機づけ・態度に関する目標が示されている。また、言語事項においても情報教育との関連が認められる。

(2) 教科書と情報活動

具体的な教科書の内容（題材）との対応づけの例として中学校3年生における対応を表2にまとめた。表2は、学習指導要領の中学校国語科の3年生の教科書の題材ごとに学習活動を抜き出し、どのような活動が含まれるかを検討した結果である。ここでは学習活動として、マップの利用、資料収集、情報機器の利用の3つの視点から、各単元における情報活動の有無を判断した。表2の結果から、主に言語事項にかかわる単元では情報活動が限定されるが、それ以外の「話す・聞く」、「書く」、「読む」に関する単元では、情報活動が多く含まれていることが示されたと言える。

表2 1年間の授業内容（第3学年のみ）

領域	教材名	時数	マップ	資料	機器
話す・聞く	プレゼンテーションをしよう	6	○	○	○
	効果的なスピーチ	5		○	○
	話し合いで問題を解決しよう	6	○	○	
書く	パンフレットを作ろう	7	○	○	○
	プレゼンテーションのための資料	2	○	○	○
	主張を書こう	6	○	○	
	通信文を送る	2			○
読む	永久欠番	2			○
	俳句を味わう	2		○	
	夜は暗くてはいけないか	3		○	
	いちご同盟	4	○		
	読書 ブックトークをしよう	2	○	○	○
	動物のサイズと時間	3			
	読書案内	2			
	イメージからの発想	2		○	
	テレビとの付き合い方	3			
	万葉・古今・新古今	4		○	
	奥の細道	3		○	○
	漢詩二編	2			
	故郷	4			
言語	文法の窓 敬語のはたらき	2			○
	漢語の構成	2			
	漢字のしおり 打つと撃つ	1			
	文法の窓 あいまいな表現	2			
	同音異義語・多義語	2			
	漢字のしおり 霧の中・夢の中	1			
	言語 慣用句・故事成語	2		○	
	漢字のしおり 春夏秋冬五合	1			
	漢字を楽しもう	2			
その他	課題学習	10	○	○	○

表 1. 中学校の国語科の学習指導要領と情報教育の目標の関連

	目 標	話すこと・聞くこと	書くこと	読むこと	その他の	活動
1 年	(情)自分の考えを大切にすること (情)目的や場面に応じて的確に話したり聞いたりする能力を高める (情)必要材料を基にして自分の考えをまとめる (情)的確に書き表す能力を高める (情)進んで書き表そうとする態度 (情)様々な種類の文章を読み内容を的確に理解する能力を高める (情)読書に親しみものの見方や考え方を広げようとする態度	(情)自分の考えや気持ちや相手に理解してもらえようように話す (情)話し手の意図を考えながら話の内容を聞き取る (情)自分の考えや気持ちを的確に話すためにふさわしい話題を選び出す (情)事実と意見との関係に注意して、話したり聞き取ったりする (情)話合いの話題や方向をとらえる的確に話す (情)それぞれの発言を注意して聞き、自分の考えをまとめる	(情)身近な生活や学習の中から課題を見付け、材料を集め、自分の考えをまとめる (情)伝えたい事実や事柄、課題及び自分の考えや気持ちを明確にする (情)自分の考えや気持ちを的確に表すために、適切な材料を選ぶ (情)書いた文章を読み返し、(表記や語句の用法、叙述の仕方などを確かめて)読みやすく分かりやすい文章にする (情)他人の書いた文章を読み、(題材のとらえ方や材料の集め方などについて)自分の表現の参考にする	(情)文脈の中で意味を正確にとらえ、理解する (情)文章の展開に即して内容をとりえる (情)目的や必要に応じて要約する (情)事実と意見を読み分けて、内容の理解に役立てる (情)文章の主題を考えたり要旨をとらえたりする (情)文章に表れているものの見方や考え方を理解し、自分のものを見方や考え方を広げる (情)様々な種類の文章から必要な情報を集めるための読み方を身に付ける	(情)話す速度や音量、言葉の調子や間のとり方などに注意する (情)事象や行為などを表す多様な語句について理解を深める (情)文と文との接続関係などを考える (情)指示語や接続詞及びこれらと同じような働きをもつ語句などに注意する (情)話し言葉と書き言葉との違いについて理解し、適切に使う (情)字形を整え、文字の大きさ、配列・配置に気を付けて書く	
2 年・3 年	(情)自分のものの見方や考え方を深める (情)目的や場面に応じて的確に話したり聞いたりする能力 (情)話し言葉を豊かにしようとする態度 (情)様々な材料を基にして自分の考えを深める (情)自分の立場を明らかにして、論理的に書き表す能力 (情)目的や意図に応じて文章を読む (情)広い範囲から情報を集め、効果的に活用する能力 (情)読書を生活に役立て自己を向上させようとする態度 (VP)文章を書くことによって生活を豊かにしようとする態度	(情)広い範囲から話題を求め、話したり聞いたりして、自分のものの見方や考え方を広めたり、深めたりする (情)話の中心の部分、事実と意見との関係に注意し、論理的な構成や展開を考えて、話したり聞き取ったりする (情)話の内容や意図に応じて適切な語句の選択する (情)文の効果的な使い方や説得力のある表現の仕方に注意して、話したり聞き取ったりする (情)相手の立場や考えを尊重し、話合いが目的に沿って効果的に展開するように話したり聞き分けたりする (情)話合いの中で自分の考えを深める	(情)広い範囲から課題を見付け、必要な材料を集め、自分のもの見方や考え方を深める (情)自分の立場及び伝えたい事実や事柄を明確にする (情)文章の形態に応じて適切な構成を工夫する (情)自分の意見が相手に効果的に伝わるように根拠を明らかにする (情)論理的展開を工夫して書く (情)書いた文章を読み返し、文や文章を整えて、説得力のある文章にする (情)他人の書いた文章を読み、論理的展開の仕方や材料の活用の仕方などについて自分の表現に役立てる	(情)文脈の中における語句の効果的な使い方について理解する (情)他人の書いた文章を読み、自分の言葉の使い方に役立てる (情)書き手の論理の展開の仕方を的確にとらえる (情)書き手の論理の展開を、内容の理解と自分の表現に役立てる (情)表現の仕方や文章の特徴に注目する (情)文章を読んで、人間、社会、自然などについて自分の意見をもつこと。 (情)目的をもって様々な文章を読み、必要な情報を集めて自分の表現に役立てる	(情)音声の働きや仕組みについて関心を持ち、理解を深めること。 (情)抽象的な概念などを表す多様な語句についての理解を深め、語感を磨き語彙を豊かにする (情)相手や目的に応じて話や文章の形態や展開に違いがあることに気付く (情)共通語と方言の果たす役割などについて理解するとともに、敬語についての理解を深め生活の中で適切に使えるようにする (情)字形、文字の大きさ、配列・配置などに配慮し、目的や必要に応じて調和よく書くこと	

3-3. 考察

研究1では、まず中学校国語科の学習指導要領を分析して、情報教育との関連が強いことを示した。さらに、具体的な教科書にあたることで、教師が利用できる身近な教材においても情報活動が多く含まれていることを示すことができた。小川・戸田・石野(2002)が小学校の国語科と情報教育について指摘したのと同様、中学校の国語科においても情報教育との関連が強いことが示されたとと言えるだろう。

また小川・荒島・井澤(2004)が理科教育と他教科の関連について指摘したように、情報教育を柱として他教科と連携しながら国語科の目標を達成する可能性についても、十分に検討する必要があると言えるだろう。

4. 研究2「中学校国語科における実践」

研究2では、情報教育と中学校国語科の内容の対応づけをおこなった研究1の成果を具体的な教育実践の形で示す。

4-1. 方法

【場所】宮城県の公立中学校

【時期】平成16年6月

【学習者】中学校3年生を対象に授業実践を行った。生徒は男子20名、女子17名、計37名。

【学習者の実態】明るく元気な生徒が多く、授業態度もおおむね良好である。様々な文章を読んで、自分の意見をまとめたり、発表したり、相手の意見を聞いて考えを深めたり、学習に対して、意欲的な取組が見られる。反面、進んで調べたり質問したりすることに苦手意識を持っている生徒もいる。

学習者の実態を客観的にとらえるために、事前に生徒の意識調査を実施した。「調べたことをまとめたり自分の意見や考えをまとめる活動が好きですか」という問いに対して、65%の生徒が「はい」と回答した。その理由として、まとめることが好き、楽しい、まとめたものを見たり見てもらったりしたい、まとめる活動を通していろいろな知識を獲得することができる、書く力をつけたい、将来に役立つ、まとめる活動はどんなことにも共通するなどがあげられた。調べてまとめること、すなわち書くことは国語の授業にとどまらず他教科や総合的な学習の時間にも行われ、生活の中で日常的に行われている活動である。自分たちの生活と結びつけて考えている生徒もいることが分かった。また35%の生徒がいいえと回答した。これらの生徒は集めた情報を取捨選択、分類、整理し、自分の考えをまとめるという一連の活動について、まとめることが苦手、下手、面倒くさいと感じていたようだ。

「文章を書くときに困ることや悩むことは何ですか」という問いには、漢字が出てこない、どんな内容にしたらいかが分からない、適切な言葉が浮かばない、文の構

成を考えると悩んでしまうなどがあげられた。このことから、生徒は、文章を書くときに、なるべく漢字を使おうとしている、どんな内容にしたらいかが、文の構成を考え、書き出しの工夫などを考えている実態が明らかになった。

【学習目標】

- ・伝えたい事柄や立場を明確にして、文章の形態に応じて構成を工夫する。
- ・興味や関心をもって調べて分かった情報を、相手に効果的に伝わるようにパンフレットにまとめる。
- ・互いの作品を交流しあい、工夫している点を今後の自分の表現に役立てる。
- ・多様な語句についての理解を深め、語感を磨く。

表3に題材の評価規準を表4に指導計画を示した。

表3 題材の評価規準

国語への関心・意欲・態度	書く能力	言語についての知識・理解・技能
①広い範囲から必要な材料を集め、自分の立場や伝えたい事柄を明確にし、文章の形態に応じて構成を工夫しようとしている。 ②互いの作品を読み合って自分の表現に役立てようとしている。	①パンフレットの形態を知り、集めた情報の中からパンフレットに載せる内容を選択し、適切な内容構成をしている。 ②パンフレットの内容を説明する文章を、相手や目的に応じて効果的に書いている。 ③お互いのパンフレットを交流し、検討し合っ工夫点などを見つけている。	①目的に合った効果的なキャッチコピーを工夫して作っている。

表4 指導計画

時	目 標	学 習 活 動	評価規準との関連
1	パンフレット作りについて学習の見通しを持ち、テーマを決める。	・教科書を読んであらましをつかむ。 ・何についてのパンフレットを作るかイメージマップを活用して考える。	【関①】
1	パンフレットの形態を知り、よいパンフレットの条件を考える。	・集めてきた様々なパンフレットを見合い、内容や形式などで工夫している点を見つける。 ・よいパンフレットの条件を考える。	【関②】 【書③】
1	テーマを基に、内容の構成を決める。(本時)	・テーマから、関連する内容を考え、選択した適切な内容を、それぞれをどのように構成するか考える。 ・伝えたい事柄や内容をラフスケッチする。 ・考えた内容をグループ内で発表する。	【関①】 【書①】
1	目的にあったキャッチコピーを決める。	・集めた広告やパンフレットからキャッチコピーとは何かを考える。 ・パンフレットの内容からキャッチコピーを考えて決める。	【関①】 【言①】
2	内容をわかりやすく説明するための文章を書く。	・小見出しをつけて文章を書く。 ・よいパンフレットの条件に基づき推敲する。 ・書いた文章を読み合い、検討し合う。	【書②】 【言①】
1	パンフレットを交流させ、検討し合う。	・できたパンフレットを読み合い、相互評価する。	【関②】 【書③】

〔单元・題材〕書く

東京書籍国語教科書「パンフレットを作ろう」

「生きる力」との関連で、国語科に求められることとして「論理的な思考力や表現力の育成」と「情報活用の実践力の育成」があげられる。前者については、様々な材料を基にして自分の考えを深めたり、自分の立場や意見を明確にするとともに適切な根拠を示したりするなど、論理の展開を工夫して、説得力のある表現を身に付けるための学習活動を繰り返し行うことが重要である。後者については「説明や発表などを行うこと」「報告や意見発表会などのために簡潔で分かりやすい文章や資料などを作成すること」などの言語活動例を効果的に活用して育成することが求められる。この題材で取り扱うパンフレットは「読む広告」である。したがって、パンフレットを制作するには、広告として優れた説得力を持つ文章とそれをレイアウトする編集が欠かせない。写真があり、解説の図があり、グラフがあって、読者に視覚的にもアプローチしてくる。また、パンフレットを渡す相手が誰なのかが明確になっているという特徴がある。そのため想定した相手、読者が共感できる編集内容が必要になる。例えば、旅行パンフレットは、ツアーという商品を探めている相手に、その旅がいかに楽しいものであるかを伝える必要がある。誰に何を伝えたいのか相手意識や目的意識を明確にし、様々な表現技法を工夫しながら、分かりやすい文章を書くことが求められる。本題材は、論理的な思考力や表現力、情報活用の実践力を育成するには格好の題材であった。

〔学習指導の重点〕

①考える力を身に付ける

具体的な活動として、イメージマップを活用する。マップを使って、これまで学習してきたことや自分の興味、関心、身の回りの事柄などから、自由に発想を広げ、テーマを考えたり、パンフレットに載せる内容を考えさせた。読み手に伝えたいことを効果的に伝えるためにはどうしたらよいのか、相手に分かりやすい文章を書くためにどうしたらよいのかを考えて、工夫したり、可能性を追求したりさせたい。

②表現の仕方を身に付ける

表現の方法として、キャッチコピーを作る際に、広告表現の学習を取り入れた。広告表現は、購買行動へ誘うことをねらってキャッチフレーズで問題意識を喚起し、アピールポイントをボディコピーの中に短い言葉で表現する。それによって、課題の発見と問題に対する理解や認識が深まる。また、目的や相手、場面などに応じて、言葉を選択し、適切に表現する力が育成されると考える。誰が見るのか？どこで使うのか？相手意識、目的意識を持たせて「書く」活動に取り組ませたい。

③問題点の解消

生徒の意識調査から分かった問題点（漢字が出てこない、どんな内容にしたらよいか悩む、書く材料がないな

ど）を解消するために国語辞典や資料集などを準備し、生徒が自ら調べたり考えたりする環境を整えたい。

〔指導の目標と評価〕

①ねらい

- ・伝えたい事柄や立場を明確にして、文章の構成を工夫して書こうとする。
- ・集めた情報の中からパンフレットに載せる内容を選択し、適切な内容構成をする。

②具体の評価規準

【関心・意欲・態度】伝えたい事柄を明確にし、相手に分かりやすく内容が伝わるように工夫しようとしている。

【書く能力】集めた情報の中からパンフレットに載せる内容を選択し適切な内容構成をしている。

4-2. 結果と考察

〔授業単元の全体像〕

今回の授業実践は3時間目（7時間扱い）の実践であった。実際に行った授業内容を表5にまとめた。

表5 指導過程

主な学習活動	指導上の留意点及び具体的評価規準(評価方法)
1 本時の学習活動とねらいが分かる。	・ねらいを分かりやすく示し、生徒が主体的に取り組めるよう意識付けをする。
2 決定したテーマから、イメージマップを使ってさらに発想を広げる。	・伝えたい内容の中心となる言葉をいくつか考えさせ、言葉を言い換えたり、似たような表現を探させたりしながら、一緒に言葉を広げてやる。
3 どのような事柄をパンフレットに載せるか内容を決める。	・載せたい情報が多い場合には、紙面の構成を考えながら適当な数の情報に絞り込むよう助言する。
4 パンフレットに載せる内容をどのように構成するかラフスケッチする。	・あまり助言をせずに、生徒の自主的な活動を見守り、生徒の考える時間を確保したい。 ★伝えたいことは何か尋ねながら、伝えたいことを明確にできるよう助言する。 ☆伝えたい事柄を明確にし、相手に分かりやすく内容が伝わるように効果的な小見出しを考えたり図解したりしてラフスケッチしようとしている。【関】(イメージマップ、ラフスケッチ) ★それぞれの内容をどのように組み合わせたり配置すれば、伝えたいことが伝わるか尋ねながらラフスケッチに取り組めるよう助言する。 ☆テーマを基にして読み手に興味を持ってもらえるように、その部部の内容を的確に表すような小見出しをつけたり写真や図の配置を工夫して書いている。【書】(イメージマップ、ラフスケッチ)
5 考えたラフスケッチをグループで発表する。	・特に、まとめる活動に苦手意識を抱いている生徒を中心に机間指導しながら、場面場面で教師も助言する。 ・参考になる意見はメモさせる。
6 本時の自己評価を行う。	・活動を振り返って気づいたことや発見したことを再確認させる。

☆十分満足と判断される状況 ★「努力を要する」と思われる生徒への支援の手だて

〔本時の学習活動〕

授業中の板書の様子を図1に示した。板書そのものがマップの形で描かれており、生徒がマップを利用して思考することを促進していることが示されている。

生徒が描いた、テーマの設定のためのマップと、それとともに描かれたポスターのラフスケッチの実例を図2に示した。ラフスケッチを使って、自分のアイデアを班の中で発表し、改善する活動を行った。



図1 授業中の板書の様子

生徒はラフスケッチをもとに、パンフレットを作成した。作成したパンフレットの例を図3に示した。

[本時の授業評価（効果と課題）]

このクラスでは、テーマを決めたり題材を探したりするときにはマップを活用している。今回も生徒はマップを活用して、身の回りのことやそれぞれの興味関心から発想を広げ、テーマに関する材料（情報）を集めることができた（図2）。

ラフスケッチの段階では、伝えたい内容を表す言葉やキーワードを考え、小見出しを工夫していた。また、小見出しを考えることで伝えたいことは何か、再確認する



図3 中学生が仕上げたパンフレット

ことができたようだ(図2)。

ラフスケッチの発表では、仲間の発表を聞いて、自分

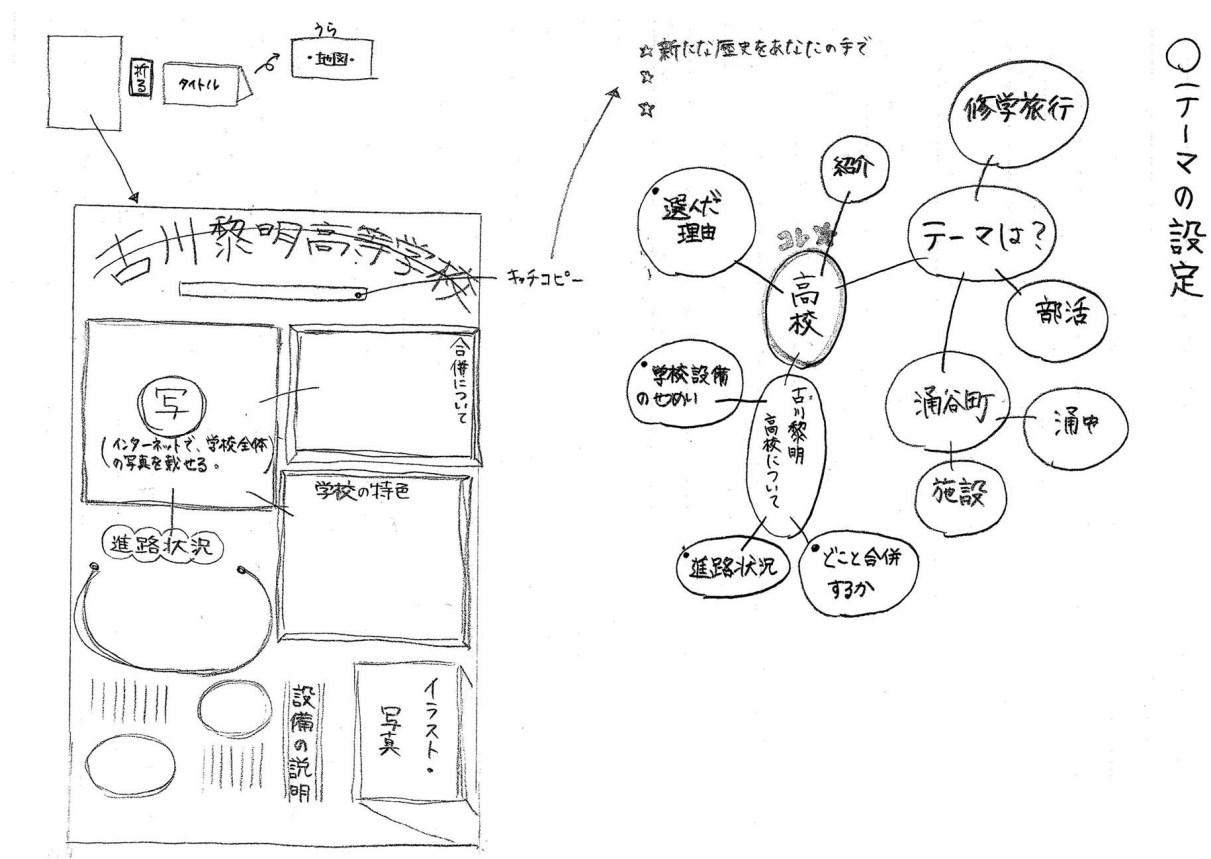


図2 中学生が描いたマップ^oとラフスケッチ

のパンフレットの構成や表現に役立てることができたようだ。また、自分の考えや構想を確実にしたりよりよいパンフレットに修正したりすることにつながった(図3)。

ただ、今回の授業では、テーマから発想を広げる際、ラフスケッチを例示する際に、生徒に分かりやすいようにと、丁寧な説明をしてしまった(図1)。丁寧な説明をすることで生徒の活動はスムーズになるが、学習者の考える機会を奪うことになりかねない。教師は必要以上の説明や助言をしないように心がけすべきであると感じた。むしろ生徒がパンフレットの構成をじっくり考えたり小見出しを工夫したりする時間の確保に努めることが重要である。

生徒の作成したパンフレットの内容は、部活動、趣味、高校、環境、自分や家族、学校や町、修学旅行に関するものであった。テーマを考える際に、自分の身の回りの事柄から必要な材料を集めて、伝えたいことを明確にしていたことが分かる。作成段階の情報収集では、情報源として、ホームページ、新聞記事、雑誌、パンフレット、インタビュー、各教科の教科書を活用していた。

生徒たちが秀作だと判断したパンフレットは、内容が分かりやすく充実しているものだった。内容を充実させるためには、(1)情報を収集し、項目毎に並べたり、不必要なものを見分けたりするなどして分類整理する。(2)分類した情報にキャッチコピーや見出しをつけ、内容に合う画像を配置し、簡潔な文章で説明すること。(3)さらに色の組み合わせを考えたり、レタリングしたりして、視覚的に訴える、などの工夫が必要になる。

単元終了後の生徒の自己評価では、情報を収集する力、文章力(書く力)、創造力、考える力、工夫する力、伝える力、色や絵の使い方が身に付いたと記述している生徒が多かった。

5. まとめ

研究1、研究2の結果から、以下のようなことが明らかとなった。

(1) 中学校の国語科に置いても、小学校の国語科と同様、情報教育と強い関連が認められること。言語事項以外の学習指導要領のほとんど全ての内容が情報教育、特に情報活用の実践力に関係していたことから、関連の強さは明らかである。国語を含む、全ての教科が連携することで、中学校における情報教育の量と質が向上すると考えられる。

(2) 中学校の国語の授業の中に情報教育的な活動を含めていくことは、非常に容易である。国語の教科書の内容を分析した結果、情報活動が多く含まれていたことから、教師が少し意識を変えるだけで、情報教育としての内容を盛り込むことが可能であることが示された。

(3) 授業実践の結果から、実際に国語科の授業の中に、情報教育的な内容を盛り込んでいく際には、適切な課題

を用意して生徒に考えさせたり推敲したりする時間を確保することが重要であることが示された。作業の効率化を求める余り、過剰に指示を与えることは、情報教育の(国語科の)目標を達成する妨げとなる。

文献

- 情報化の進展に対応した初等中等教育における情報教育の推進等に関する調査研究協力者会議 1997 体系的な情報教育の実施に向けて 文部科学省
メディア教育開発センター 2001 総合的な学習の時間-情報教育のカリキュラム開発と支援教材- CD-ROM
文部科学省 1999 中学校学習指導要領解説 国語編
文部科学省 2002 情報教育の実践と学校の情報化～新「情報教育に関する手引」～
文部省 1998 中学校学習指導要領
小川亮・石野正彦・鎌田恵子・戸田祐子 2003 発想法を取り入れた国語科授業の実践と評価 -情報教育の視点を活かした小学校中学校における実践- 富山大学附属教育実践総合センター紀要, Vol.4, pp.64-74.
小川亮・戸田正明・石野正彦・福保雄成・竹花史康・鎌田恵子・佐藤洋司・越坂米景・林憲昭・伊藤充児・仲良永克 2000 情報教育からみた小中学校における学習活動の分析. 日本教育工学会研究報告集, JET2000-6, pp.15-20.
小川亮・戸田正明・石野正彦 2002 情報教育からみた小中学校における学習活動の分析. 富山大学附属教育実践総合センター紀要, Vol.3, pp.73-81.
小川亮・荒島晋・井澤陽子 2004 情報教育からみた中学校理科における学習活動の研究 富山大学附属教育実践総合センター紀要, Vol.5, pp.115-121.

※富山大学教育学部は平成17年10月1日より富山大学人間発達科学部となりました。
それにともない教育学部附属教育実践総合センターも、人間発達科学部附属人間発達科学研究実践総合センターに改称されています。
本紀要は、学部名が変わる前に原稿が締め切られていますので、もとのままの教育実践総合センター紀要として発行しています。その点ご了承ください。
※論文の掲載順は、教育学部の職員名簿に順じています。

富山大学教育実践総合センター紀要編集委員会

委員長	市瀬和義
委員	田上善夫
	小林真
	松本謙一
	竹井史
	佐伯真人
	尾崎康子
	小川亮
	稲垣応顕

富山大学教育実践総合センター紀要

平成17年12月22日 発行

編集兼	富山大学人間発達科学部
発行者	附属人間発達科学研究実践総合センター
	〒930-8555 富山市五福3 1 9 0
	Tel (076) 445-6380
印刷所	中央印刷株式会社
	〒930-0817 富山市下奥井 1-4-5
	Tel (076) 432-6572 (代)
